

待兼山俳句会

第六百八十四回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来眞知子
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和六年二月十九日（月）

会場 大阪俱樂部 会議室 締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・東中 乱
東野太美子・向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者

植田真理・碓井遊子・草壁 昴・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江
西川盛雄・根来眞知子・平井瑛三

出席者十二名＋投句者十名 計二十二名

兼題

寒明・野焼く（幹三） 草萌・冴返る（暁子）

当季雑詠 通じて八句

次回

例会 令和六年三月十八日（第三月曜日） 会場 大阪俱樂部 会議室 締切 午後二時
兼題 暖か・剪定（幹三） 春の闇・目刺（暁子） その他当季雑詠

選者吟

水の音変はりし村や草萌ゆる

幹三

傘まるくさして人行く暖雨かな

ひとの手に石けんなじみ暖かし

夜の雨に昼の野焼の匂ひ顕つ

暁子

火も人も躍るが如き野焼かな

一人立つ朝の厨房冴返る

幹三 選

群れて来て群れ飛び去りて冴返る

町覆ふ野焼の煙や平らかに

山菜の苦みに春を覚へたり

草萌や赤牛群れる草千里

村遠し野火点々と夕暮るる

野焼あと大地の起伏明らかに

薬湯の用意ある宿寒戻る

窓開き何やら芳し寒の明け

◎青空に並ぶ鉄塔冴返る

草萌や白きスカートひるがへり

冴返る父の腕に新生児

野焼の香鼻を離れず夕仕事

◎野焼する煙に昏き夕日かな

父無き子の吾に野焼の火の怖し

通学路長く延びたる土手青む

◎草萌ゆる小屋の戸開けて鶏放つ

冴返り薬湯の腑に沁み渡る

◎火も人も躍るが如き野焼かな

寒明けて川沿ひ歩く足軽し

昴

兵十郎

遊子

盛雄

安廣

暁子

太美子

朱美

邦夫

真理

茉衣

太美子

安廣

かな子

邦夫

眞知子

真理

暁子

茉衣

一人立つ朝の厨房冴返る

野焼あとあまねく照らす日ざしかな

夜の雨に昼の野焼の匂ひ頭つ

◎彗星の回帰は遠し冴返る

◎孤高なるメタセコイヤや冴返る

バス降りて急ぐ家路や草萌ゆる

寒明や宮水守る武庫の山

◎堅く蓋されし野井戸や草萌ゆる

暁子

暁子

暁子

兵十郎

和江

茉衣

盛雄

輝子

幹三 特選句講評

- ・ 彗星の回帰は遠し冴返る
- ・ 青空に並ぶ鉄塔冴返る
- ・ 孤高なるメタセコイヤや冴返る

兵十郎

邦夫

和江

一旦暖かくなつてからの寒さのぶり返し。自然は、どつこい、そう甘くないということです。寒さによる緊張感、厳しさもあります。そういった季語との取り合わせで作られた3句です。

・例えばハーレー彗星は約四十年後に戻ってくるそうです。いま宇宙空間のどの辺りを進んでいるのか。そんな
思いと季語との接合は納得できます。

・「鉄塔」というマテリアルが季語とよく呼応しています。
そして何より「青空」が良かった。伶俐な鋭い冷たさが
感じられます。

・丘に一本立っている高木を思いました。「生きた化石」
とも言われるこの樹の在りようと時間が進まない冴返
りは諾える取り合わせです。

・野焼する煙に昏き夕日かな

安廣

気が付いた時に、そのままの語順でさっと作られたと
ころに好感が持てます。読者それぞれに景が浮かぶこと
でしょう。匂いも伝わってきます。

・草萌ゆる小屋の戸開けて鶏放つ

眞知子

いいですねえ。早春の野に鳴きながら駆けてゆく鶏。
読者も一緒に開放された感じです。気持ちのいい一句。

・火も人も躍るが如き野焼かな

暁子

火と人の動きを俯瞰して見る、これこそ俳人の観察で

す。常套句的にならず、類想のない野焼の喧騒が描かれ
ました。「躍」を「踊」とするとまた違った印象になりま
すね。

・堅く蓋されし野井戸や草萌ゆる

輝子

人がかつて暮らしていた跡です。時は流れましたが春
はいつものように訪れます。ぎくしゃくと始まった句で
すがその分下五の季語の効き方が気持ちいいですね。

暁子 選

◎コロナ去り余生への夢草萌ゆる

翠

刺すやうな大気残して寒明くる

輝子

風変はり怒鳴る声する野焼かな

幹三

病院の前は河原や草萌ゆる

兵十郎

◎草青みこの星巡る老いの夢

翠

草萌ゆる網目のごとき根土を抱き

堯子

青空に並ぶ鉄塔冴返る

邦夫

休耕田我がもの顔に下萌ゆる

◎草萌や赤牛群れる草千里

鋼索に吊られし橋や草燃ゆる

磐座の注連に朝日や草萌ゆる

◎寒明くや老いにもありし旅心

◎薬湯の用意ある宿寒戻る

草青む有象無象の生湛へ

裏山のヴィアドロローサ草青む

村遠し野火点々と夕暮るる

寒明の朝日斜めにリビングへ

千年の再生信じ野を焼けり

下萌や遊具のペンキ塗り替へ中

◎群れて来て群れ飛び去りて冴返る

年新た窓いっぱい太平洋

寒明や宮水守る武庫の山

野焼の香鼻を離れず夕仕事

◎生与へ奪ひて走る野火や美し

真知子

盛雄

幹三

兵十郎

翠

太美子

乱

翠

安廣

邦夫

翠

輝子

昂

遊子

盛雄

太美子

乱

暁子 特選句講評

・ コロナ去り余生への夢草萌ゆる

・ 草青みこの星巡る老いの夢

・ 寒明くや老いにもありし旅心

翠

翠

翠

コロナが去り、寒が明け、草が青みはじめると、誰も旅心を抱く。老人たちも生きる勇氣と希望を持つ。こういう元気な句を詠まれる老人たちがこの会には何人かおられるのかと嬉しくなり、選ばせていただいたが、三句共同じ作者であった。作者はご病気やお身体の不自由にも拘わらず、吟行にも毎回参加されている。

・ 草萌や赤牛群れる草千里

盛雄

早春の阿蘇の雄大な風景が目に見え浮かぶ。旧かなならば「群れる」か。

・ 薬湯の用意ある宿寒戻る

太美子

温泉地だろうか、それとも鄙の地の隠れ宿だろうか。作者は暖かくなるのを待ちかねて訪ねられたが、寒さが戻ったようだ。有難い薬湯に身を浸す。

・生与へ奪ひて走る野火や美し

乱

枯草を焼いた灰は肥料となつて、牛馬の飼料や緑肥のための新しい植物を育てる。また野焼きは害虫駆除のためでもあるので、数多の虫の命が失われる。その両方の使命をもつて野火はひた走る。「美し」はいらないのではないか。「生与へ生を奪ひて野火走る」？

・群れて来て群れ飛び去りて冴返る

昂

ヒッチコックの「鳥」という恐ろしい映画を思い出した。あれは鷗だった。この句の鳥は雀や椋鳥のような小さな鳥の群れだろう。群れを成してやってきて、しばらく大樹の中で思い切り囀っていたかと思うと、また群れを成して飛び去る。静寂が戻ると、ふと寒さを感じる。

互選三句

朱美 選

ピアノの音はころびており寒明くる 真理
争ひに軋む時代や春寒し 安廣
限りある人生愛し草萌ゆる 翠
限りを意識しながらも自然に受け入れていることに感服。

瑛三 選

草萌や赤牛群れる草千里 盛雄
一人立つ朝の厨房冴返る 暁子
街角にパン焼く匂寒明くる 輝子
さりげない風景。パン焼く匂に幸福感。

和江 選

彗星の回帰は遠し冴返る 兵十郎
快晴の朝の朗報寒明くる 兵十郎
水の音変はりし村や草萌ゆる 幹三
村の川の音に春の喜びを、大地にも明るさを感じます。

かな子 選

冴返る父の腕に新生児 茉衣
草萌や雀は細き脚で跳ぶ 幹三
ため息一つ畦焼き終はる老農夫 翠
父祖伝来の田畑を守り続けてきた農夫の感慨と寂寥。

邦夫 選

風変はり怒鳴る声する野焼かな

幹三

凜と咲く蕾まねたし冴返る

茉衣

水の音変はりし村や草萌ゆる

幹三

川の水音の変化と草の芽生え。村に待望の春の到来。

恵子 選

君天へ冴返る地に吾を残し

乱

冴返る月中天に貼り付きて

安廣

赤と黒これぞ野焼の真骨頂

邦夫

火の色にポイントを当てこれぞという表現が凄い。

言成 選

冴返る空に鳥の交はす声

朱美

冴返る月中天に貼り付きて

安廣

をとめ座の鋭き光冴返る

兵十郎

一等星スピカの白い輝きを見事に詠まれました。

堯子 選

争ひに軋む時代や春寒し

安廣

野火走る燐り消ゆる吾が思ひ

乱

生与へ奪ひて走る野火や美し

乱

野を焼く意味とそれ故の感動を端的に表現された。

太美子 選

火も人も躍るが如き野焼かな

暁子

快晴の朝の朗報寒明くる

兵十郎

水の音変はりし村や草萌ゆる

幹三

「水の音」の表現が美しく早春の清澄な空気を感じる。

輝子 選

薬湯の用意ある宿寒戻る

太美子

草萌ゆる小屋の戸開けて鶏放つ

眞知子

春一番リハビリの杖阻みけり

瑛三

辛いけれど楽しみなリハビリが風のため中止に。残念！

兵十郎 選

水の音変はりし村や草萌ゆる

幹三

傘まるくさして人行く暖雨かな

幹三

風変はり怒鳴る声する野焼かな

幹三

風で炎の向きが変わると大事故になる。その臨場感。

茉衣 選

争ひに軋む時代や春寒し

安廣

石垣に小さき影あり草萌えて

安廣

草萌や雀は細き脚で跳ぶ

幹三

萌え出た草に混じる背丈が同じ雀への一茶に似た眼差し。

眞知子 選

迷ひ猫ひとつそり納屋に冴返る
水の音変はりし村や草萌ゆる
風変はり怒鳴る声する野焼かな
燃え盛る炎も男たちの怒号も春を呼んでいるのです。

茉衣

幹三

幹三

翠 選

下萌や遊具のペンキ塗替へ中
通学路長く延びたる土手青む
やはらかく挫けず生きむ草青む
作者の意図に全く共感。

輝子

邦夫

太美子

盛雄 選

鴨の陣日の差す方へ向ひけり
一人立つ朝の厨房冴返る
野焼する火色明るき古都の夜
京都の夜大文字か、夜空に輝く野焼きの火色が印象的。

遊子

暁子

瑛三

安廣 選

料峭や干されし舟の底の傷
水の音変はりし村や草萌ゆる
やはらかく挫けず生きむ草青む
萌え出る草に改めて前向きに生きる力を貰った。

幹三

幹三

太美子

遊子 選

草萌や雀は細き脚で跳ぶ
草青む有象無象の生湛へ
限りある人生愛し草萌ゆる
加齢の身でも気分は青春萌え出づる草の芽の様に。

幹三

乱

翠

乱 選

裏山のヴィアドロローサ草青む
村遠し野火点々と夕暮るる
下萌や遊具のペンキ塗替へ中
塗り替えられた遊具と下萌が子供を待つ。春の始まり。

翠

安廣

輝子

ご報告

会報係

今回の兼題は「寒明」、「野焼く」、「草萌」、「冴返る」でした。「かんあけ」、「のやき」、「くさもえ」と名詞で使う場合は送り仮名を省略しました。「さえかえる」は兼題の通り「冴返る」と表記しました。お二人の選者は逐一傍線を引いておられますが、僭越ながら編集者が統一させて頂きました。

参加者自選句

冴返る夜空に満月慈悲の顔 解体ショウまぐろの眼冴返る 過ぎし日や阿蘇遠野火の山黒し 父無き子の吾に野焼の火の怖し 男等の野火の焰に張り詰むる 寒明を待たず友逝く赤ワイン 黒々と斜面の先の草燃ゆる さんざめく野にある命草萌ゆる やはらかく挫けず生きむ草青む 冴返る遅れて来たる子がひとり 呼ばわらる朝の近道畦を焼く バス降りて急ぐ家路や草萌ゆる 草萌ゆる小屋の戸開けて鶏放つ 黒煙の天突き破る野焼かな 裏山のヴィアドロローサ草青む 寒明や宮水守る武庫の山 寒明けて物みな動く土の中 年新た窓いっぱい太平洋 生与へ奪ひて走る野火や美し	朱美 瑛三 和江 かな子 邦夫 恵子 言成 堯子 太美子 輝子 兵十郎 茉衣 眞知子 真理 翠 盛雄 安廣 遊子 乱
---	--

ひふひふ

山田安廣

皆様方にGoogleフォームによる編集の勉強会にご参加下さるよう、呼びかけておりますが積極的なお申し出でが殆ど無く苦慮しております。(最悪の場合は外注を続けざるを得ない可能性もあります。が、その場合は皆様方にそれなりの費用負担をお願いしなければならぬ可能性がございます。)

今回は幹三さんから最近中八の句が多いが、中八は極力避けるように。

また「野焼あとはや生ひ出るけはいかな」「寒明けて物みな動く土の中」などは少し大雑把過ぎて具体性に乏しい。もう少し具体的に表現する方が良い、などのご指摘がありました。